

“BIRTH CONTROL REVIEW (産児調節評論)” ゼミ

報告：良 香織*・田代美江子

本ゼミは、マーガレット・サンガー主幹の月刊誌『産児調節評論 (“BIRTH CONTROL REVIEW” 1917～40)』を分析検討することで、1920～30年代の日本を含む国際的な産児調節運動の実態と当時のフェミニズムと性をめぐる課題を明らかにすることを目的としている。将来的には、この取り組みによって明らかになった状況を、現在の各国のフェミニズムや性、性教育をめぐる動向と比較検討し、グローバル化した現代社会の中での日本の性と性教育の課題と役割について考察したいと考えている。

特に 2000 年度・2001 年度においては、『産児調節評論』復刻版を読み進めるにあたり、まず掲載されている論文や記事を、国別、事項別、主要論者別に分類し、その概要を把握していく方針のもとでゼミを進めてきた。

国別では、まず日本の記事を拾い出すとともに、サンガーが産児調節運動を精力的に進めていたアメリカ、サンガーと並んで 20 世紀前半の産児調節運動を担ったマリー・ストープスのイギリス、またそれぞれの研究のフィールドや問題関心に応じ、北欧、アフリカ、アジア、イスラム圏などの状況が記されている記事・論文をピックアップすることとした。

事項別では、人口問題、栄養問題、宗教・教会との関連、戦争といった社会状況と産児調節運動との関連について検討することとした。

主要論者別では、サンガーを始め、『性と社会』を著したイギリスの医学・性科学者であるハヴェロック・エリス等の論稿を中心に拾い出した。また、国別とも関連し、日本の論客として、サンガーのもとで産児調節の知識と技術を学び、日本の産児調節運動の一翼を担った石本静枝、その夫であった石本恵吉、また、社会主

*女子栄養大学大学院栄養学研究科

栄養学専攻修士課程 2000 年度修了

義系知識人としての立場から産児調節に関わった安部磯雄などの論文、記事を拾い出すこととした。

2001 年度のゼミでは、こうした分類による記事のピックアップとともに、基礎資料として『性と生殖の人権問題資料集成 解説』（不二出版、2000年）を取り上げ、学習した。これによって、産児調節運動、優生問題、人口政策、性科学、性教育を通して、「性」や「生殖」が諸外国からどのような経過を経て日本に根付いていったかという点についての大枠を把握することができた。

さらに、国別の分類に従って、日本についての論稿を中心に、ある程度読み進めることができた。それによって、日本における産児調節運動の特徴がすでに浮き彫りになってきている。例えばそれは、産児調節（避妊）が宗教や法律で禁止されている欧米とは異なる日本の文化、性に対する価値観が産児調節運動に与えている影響や、他のアジア諸国との異なった状況などである。この他、北欧諸国などについては、同じ北欧でも母性保護が協調されているのか、あるいは男性の責任を追及するのかといった違いが見られ、今日的なジェンダーの視点からも非常に興味深いと思われる。これらの点についての詳細は、本紀要の橋本紀子論文、「1920-30年代日本の産児調節運動にみられるジェンダー観—The Birth Control Reviewを中心に—」を参照されたい。

今後は前年度の作業を継続しつつ、諸外国の中でも特にアメリカ、イギリスを中心に産児調節運動の状況を把握していきたい。また、日本における産児調節運動の拠点であった大阪と東京において、関連資料の収集と聞き書き調査を行なう予定である。